

## 《2024年度 東京中会日曜学校教師研修会》

主題 「子どもたちを神の家族に  
—私たちが信じていること、伝えたいこと」

講師 藤井和弘（南浦和教会牧師）

日時 2025年1月13日（月・休）10時半～15時

会場 日本キリスト教会 鶴見教会

### 講師からの招き

このたび、東京中会日曜学校教師研修会で講師を務めさせていただくことになりました。毎週、教会に集まってくる子どもたちのために、説教や分級の準備に励んでおられることと思います。

日曜学校は、教会の大切なわざの一つです。そのことの意味は、教会が自分たちの信じているところに立って、子どもたちに神さまのメッセージを語ることにあります。どのような子どもであっても、神さまは子どもたちひとりひとりを招いておられます。かつて私がお世話になった三瓶長寿牧師は、日曜学校のはたらきについて、子どもたちが「自分は神さまに愛されている」という思いを自分自身の中に育んでいけるようにお手伝いすることだと話してくださいました。「子どもたちを神の家族に」という主題は、そのような意味を込めています。

皆さんの中には、日曜学校教師として長く奉仕されてきた方もいらっしゃる、最近、日曜学校教師になられたという方もおられると思います。私が日曜学校教師になったのは23歳の時でした。日曜学校教師になるのが当たり前という空気の中で、ほとんど準備のないまま子どもたちの前に立って説教した時の緊張を今でもおぼえています。私がお話することは、いつも隙間の多い、まとまらないものです。ですが、その分、説教を準備する上で心がけていることや苦勞していること、また、実際どのような準備をしているのかについて、ご一緒に考えることができればと思っています。どうぞ、よろしく願いいたします。

（南浦和教会牧師 藤井和弘）

## 【プログラム】

- ・10:00 受付開始
- ・10:30～10:45 講師紹介、お祈り 担当：高松牧人  
讃美歌 21 544番  
聖書 マルコによる福音書4章1～9節（新共同訳）
- ・10:45～11:45 講演 藤井和弘（南浦和教会牧師）  
「子どもたちを神の家族に  
—私たちが信じていること、伝えたいこと」
- ・11:45～12:00 小休憩（質問などを書く時間）
- ・12:00～13:15 昼食（教会外または教会地階のホール）
- ・13:15～14:00 発題（3人の方々） 担当：藤田浩喜  
齋藤 弘 （世田谷千歳教会）  
長谷川 裕子 （習志野教会）  
檜山 道子 （横浜海岸教会）
- ・14:00～15:00 全体協議 担当：藤田浩喜
- ・15:00～15:10 閉会祈祷 担当：高松牧人

## 【お知らせ】

- ・ご持参されたペットボトル等の飲み物で水分補給をなさってください。感染症防止のため、マスクの着用にご協力くだされば幸いです。
- ・昼食は教会近隣での外食をお勧めしますが、地階集会室も一定人数利用することができます。ペットボトル等のゴミはお持ち帰りください。

「子どもたちを神の家族に ー私たちが信じていること、伝えたいこと」

藤井和弘

はじめに

I 日曜学校ー“私たち”が仕えている場

1. 教会のわざとして

- ・第一回大会(1951) 「日曜学校教案作製に関する建議案」
- ・日曜学校に出席する子どもの減少 最高値 5,437名(1955)  
日曜学校平均出席者数(2023) 328名(+32) 1教会・伝道所平均2.5人
- ・子どもたちに福音を語り続けること …日曜学校は今も教会のわざ

2. 子どもたちー日曜学校が対象としているもの

○子どもの発達段階

乳児期(1歳半頃まで)	保護者の全面的な世話を通しての基本的信頼感の獲得(人生に対する基本的態度)。単語程度の言葉。
幼児期(6歳頃まで)	言葉による意思表示。周囲の大人の生き方を模倣する経験。自分と違う他者の存在や視点に気づく。直感的な感覚。
学童前期(小低学年)	言語能力や認識力の発達。善悪についての理解と判断。
学童後期(小高学年)	客観的・論理的思考。集団の影響。発達における個人差。
青年前期(中学生)	自分の内面への探求。自分の生き方を模索。葛藤。
青年後期(高校生)	大人の社会を展望。自分の人生に対する主体的判断。

○子どもが生活している社会(現代)

- ・効率性、利便性、快適であることの追求。結果を重視する価値観。
- ・社会における経済格差の広がり、それに基づく教育格差。
- ・家族、学校、地域などの“共同体”の弱体化あるいは崩壊。
- ・情報社会
- ・ストレス、主観的、薄っぺらなアイデンティティ、自己肯定感の低さ。

→「子どもが子どもとして成長することの困難な世界」

3. 日曜学校教師として立てられる ※『式文』日曜学校校長就職式(日曜学校教師)

- ・主イエス・キリストの召し、日本キリスト教会信仰の告白に従うこと(教師)。
- ・「あなたがたが選んだこの兄弟姉妹」(教会員)。
- ・「幼い者たちに神の国の福音を宣べ伝え、彼らをキリストの救いに導くために、日曜学校を設け、いまこの兄弟姉妹を…つとめに就かせてくださったことを感謝します。」(祈り)

→すべての日曜学校教師が教会の姿勢を代表し、教会もそのように見なしている。

II 子どもたちへの説教

1. 特に、心がけておきたいこと

- ・子どもたちが理解できる言葉と象徴
- ・ひとつのメッセージ、ひとつのアイデア
- ・時間 5~7分?

2. 説教の準備

(大まかな流れ) 聖書箇所を読む → 教案他を読む → 思い巡らす → 原稿を書く

①聖書箇所を読む

- ・御言葉と向き合うー困難なとき、けれども、楽しいとき  
「神は、この聖書箇所をとおして、私に何をお語りになるのか。そして、この私をとおして、今日曜学校に来ている子どもたちに何をお語りになるのか。」
- ・ゆっくり、ていねいに読む 「正確な解釈」「何を語るか」は後回し  
書き写す(PCに打ち込む)、声に出して読む(ボイス・レコーダーに録音)
- ・いろいろな問いをもって読む  
自分の想像力を刺激するものはあるか(印象、疑問、反論、他の聖書箇所)。自分に不慣れな言葉や言い回しはあるか。どのような場面から成り立っているか。重要な思想はあるか(三位一体の神のみわざ、「信仰」「希望」「愛」)何が書いてあるのか。それが書かれた(語られた)理由や目的は何か。

②教案、注解書を読む

『日曜学校教案』、『旧約聖書新約聖書講解』、注解書。

○教案や注解書ができること

- ・聖書箇所についての私たちの理解を手助けする  
文書(文学類型)、著者、時代背景、文脈、語句の説明、引照箇所・並行箇所、ポイント、留意点など。

○教案や注解書ができないこと

- ・私たちの説教を聞く子どもたち、私たちが奉仕する日曜学校について。

③思い巡らすーメッセージを考える

- ・聖書からの促し、子どもたちからの促し。  
→神が、私をとおして、子どもたちに語ろうとされていること! 確信  
※これが明確でないと説教は組み立てられないし、漫然としたものになる。
- ・私たちが抱く不安  
→誤った理解をしていないか。自分の意見を主張していないか。  
※メッセージの中心は、「神がなさったこと」。
- ・メッセージは、子どもたちが自分の経験に照らして神御自身と出会うことに向けられる。子どもたちが受け取るのは、神についての説明でも、神のみわざについ

ての定義でもない。生ける神のはたらきを自分が経験すること。

(創造)

「神はその御言葉によって万物を造られた。それはすべて善いものであった。」

・自分が神に造られたものであることを経験する。

→自分の命と存在は、神において肯定されている。自分のすべては神に根ざしている(神から始まっている)。神は自分の人生に対して計画(善い意思)をもっておられる。⇨偶然の人生(科学的な説明)。「自分に生きる価値はあるのか」、「生きているだけでは価値がない」。

(十字架の死と贖い)

「イエス・キリストは十字架にかかり、その死によって贖いを成し遂げられた。」

・自分が赦されているものであることを知る。

→自分が赦されるという経験は、人から愛されたり、受け容れられることが期待できない自分の現実があるにもかかわらず、なお自分が愛され、受け容れられていることを知るとき。そのことをとおして、自分の現実にかかわらず、自分自身を受け容れる勇気が与えられる。⇨自分に愛され、受け容れられる価値があることを自分で証明すること。自分の失敗や弱さを隠したり、他人との比較を恐れる。

④説教を組み立てる

・導入 メッセージにつながるもの 明確なメッセージが相応しい導入を備える そのまま聖書を物語る仕方

・本論 神がしてくださったこと一何を、何のため、どのように、私たちは何を

・結論 伝えたいことの確認。子どもたちをどこに。「あなたはどうか考えるか」。

※分かりやすい説教とは、救いの道筋が明確である説教。

→語られる説教の中に、子どもたちが自分を発見でき、自分に向かって語りかけられている愛に満ちた神の招きによって立ち上がり、恵みの賜物としてそこに差し出されている新しい生に応答する決心を与えられる。

3. 子どもたちの前に立って

説教のゴールは、原稿ではない。福音の種は蒔かれなければならない。そこに、神を信じ、神に従う信仰が起こされる(説教が目指すこと、私たちの祈り)。

説教を語る私たちの表情 喜びの表情で語ることは、主を伝えるメッセージ

私たちが語る説教は、教会が信じてきたことに根ざし、教会が聞きたいと期待していること。

私たちが説教を語るのは、礼拝の場—自分を教師に立て、自分の語る説教によって、神を喜び、主の愛と真実をもって子どもたちに仕えている日曜学校の場。

おわりに

マルコ 4: 1-9 「種を蒔く人」のたとえ

43 あなたがたも聞いておるとおり、 「隣人を愛し、敵を憎め」と命じられている。 「隣人」と「敵」の区別、愛の対象と憎しみの対象 愛には限界がある(経験している事実)

44 しかし、わたしは言っておく。 敵を愛し、 自分を迫害する者のために祈りなさい。 事態の転換 ←主イエスの権威ある言葉による 「あなたたちの敵」 敵=憎しみの図式が成り立たない

45 あなたがたの天の父の子となるためである。 父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、 正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。 「敵を愛する」目的 神に属する人になる 誰もが日常経験できる事実(自然)「空の鳥」、「野の花」 「敵を愛する」の根拠、無条件の愛

46 自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。 この世に属するあり方 徴税人でも、同じことをしているのではないか。

47 自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるか。 異邦人でさえ、同じことをしているのではないか。

48 だから、 あなたがたの天の父が完全であられるように、 あなたがたも完全な者となりなさい。 新しい現実<sub>に足を踏み入れ</sub> 神に属する人になりなさい

主イエスは言われる。

「敵を愛し、 自分を迫害する者のために祈りなさい。」

↓

あなたがたが天の父の子となるためである。

↓

父なる神は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、 正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる方である。

↓

あなたがたは、天の父の子となりなさい。

「隣人を愛し、敵を憎め」 あなたがたも聞いておるとおり

自分を愛してくれる人を愛する